

山の百名花

講師 佐藤 マキ子

【87】ミツバオウレン

キンポウゲ科の草木で高山帯の湿気の多いところに生え、葉は長い柄があり三枚の小葉をもち、花は花茎の頃に白花を一個つける五弁の花びら状のものはガク片で、黄色の花弁は退化し密腺となり、おしべに混じっている。類縁種のバイカオウレンは葉が掌状に五裂し花はガク片が丸く大きくウメの花に似ている。

セリバオウレンは葉が芹の葉状で花はミツバオウレンと同様である。いづれも根茎にベルベリンという成分を含み、毛根は鮮やかな黄色で、黄蓮(おうれん)として胃腸薬、特に下痢止めに薬効があることから民間薬としても用いられる。

数年前、朝日連峰を縦走したときのことである。一日目、朝日鉱泉でゆったり湯に浸かりおいしい食事で、長丁場の山行に備えた。翌朝は晴天の中、軽快に鳥原山まで歩を進め休憩をしていたところ、まだ午前中だというのに突然の雷、ハイマツ帯で逃げ場もなく、とつさにハイマツの中に頭を

突っ込み登山道に身を伏せ恐怖の中、雷の行き過ぎるのを待った。

数分後、ホツとして身体を起こしたとき目に入ったのは、無表情で無骨ながらも青々と根強く生きているハイマツの根元で、私に踏みしだかれたミツバオウレンの小さな花々の姿だった。今でも、ミツバオウレンの花を見るたび、あのとときの光景を思い出す。



【88】リンネソウ

小さいながらも凜としたその立ち姿には心そそられるものがある。スイカズラ科の草状の小低木で常緑の卵形の葉を二列に對生、六〜七月に針金状の茎枝の先に二個の淡紅色の漏斗状鐘形の花をやや下向きにつける。別名メオトバナ、エゾアリドウシと呼ばれる。姿かたちからメオトバナは納得

できるとして、アリドウシのように針を持つている訳でもなくただ花が二個咲かせるだけでエゾを冠したからといつても、何故？

リンネソウはリンネソウ属に属し、和名属名ともに、スエーデンの博物学者リンネを記念して命名、リンネはおしべの性質で網を分け、近代的な生物分類法の基礎を築いた。また、属名と種名で表す二名法を確立した学者です。

リンネソウは亜寒帯に分布ということでは北海道なら容易に見られると思ひ込んでいた。特に多くの国有植物や高山植物を有した天然記念物に指定されているアポイ岳ならなおさらのことと思っていたのに、山行中一本も見ることができず残念に思っていた。

その翌々日、幌尻岳へ登った。様々な高山植物の花々に彩られたお花畑を過ぎ、尾根に飛び出す一歩手前、手がかりを求めたハイマツの根元に咲いている日本のリンネソウを見つけうれしかった。アポイ岳は 810m、幌尻岳は 2052m その標高差は、まさに亜高山に生育の条件に合致するのだろうかだったのかと納得した。